
侍戦隊シンケンジャー 婚ノ巻

ウェイカップ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

侍戦隊シンケンジャー 婚ノ巻

【Zコード】

Z0802R

【作者名】

ウホイカツブ

【あらすじ】

外道衆との戦いを終え、久々に志波家の屋敷でくつろぐ丈瑠達に届いた、とある招待状。

そこから起ころる事件により、丈瑠は今までになかった感情を知る事となる。

その相手とは、背中を預け、命を預け、共に戦つた戦友でもある少女、白石茉子だった・・・

「セイジヤー→シンケンジャー」の後日から始まるシンケンジャー

番外編。

シンケンのカップリングは丈瑠×茉子、千明×ことはだと信じて疑わないウェイカップ初となる恋愛要素も含め、侍達の新たな一面をお見せいたします。

侍戦隊シンケンジャー婚ノ巻、これより開幕！

其ノ壱（前書き）

唐突に開始、人気の侍戦隊シンケンジャー 番外編！

甘々した展開もあり、もちろんバトルもあり！

そんなに長くならず、予定では5話以内で完結する予定です。

それではどうぞ！

(・・・どうしてこうなった・・・)

志波丈瑠は困惑していた。

普段の彼を知る者からすれば、今の状態の彼を見れば「あんた誰?」と思うだろう。

いかなる時も冷静沈着。侍の心と血を持ち、外道衆からこの世を守る侍戦隊シンケンジャーの長を務めるシンケンレッド、志波家19代目当主。それが彼の持つ肩書きだ。

だが、今の彼はどうだ。

目は宙を泳ぎ、足はガクガク震え、心臓の鼓動は『タラメなリズム』を刻んでいる。

とてもではないが、外道衆の御大将である血祭ドウコクを死闘の末に打ち倒したなど思えない容貌だ。

そんな彼の視線の先。僅か1歩半ほど先にいるのは、彼の仲間の1人でもある女性。

共に戦つた仲間の中でも、ある意味もつとも丈瑠の事を知った存在であるうその女性　　シンケンピンクこと白石茉子が纏うのは、桃色の装飾が施された純白の衣装。

対する丈瑠の服も、白を基調としたタキシードであった。

(・・・どうして、こうなった・・・)

その言葉を、もう何十回心中で呟いただらうか。
顔を動かさず横を目で追つてみれば、目の前の茉子と同じく、共に戦つた仲間達の姿。

後見人でもある年配の男性に、自分に19代目という肩書きを持たせてくれた義理の母。

更に後ろにはその仲間達の両親。そして一度だけ共に戦つた、モヂカラとは別の力を持つ戦士達の顔まである。

さて、一体ここはどうしてこのような事になつているのか？

それを知るには、数日ほど時を遡る必要がある。

とある晴れた昼下がり、場所は志波家の屋敷。

つい先日、丈瑠が戦つた外道衆の残党が関わる事件の際に、方々に散っていたシンケンジャーの面々が再び召集された。

丈瑠が外道に墮とされたり、モヂカラとは違う力を持つ戦士達の協力もあり、事件そのものは解決。

本来ならそのまま帰る予定だった仲間達だったが、久々に全員が集まつたと言う事でしばし志波家に滞在する事になり、かつて外道衆と戦つた時以来、屋敷は和氣藹々とした談笑に包まれていた。

そんなある日、志波家家老であり丈瑠のお目付け役でもあるじいやこと日下部彦馬が、屋敷の使用人である黒子の一人から今日の手紙を受け取り、その中の一つに目を通す。

「・・・おお、これはこれは」

どうやら彦馬宛だったようで、文面を読んでいる間は終始笑顔であった。

やがて手紙を読み終え、同封されていた招待券らしき手紙を見ると、中庭で昼食に頂いている丈瑠達の元へと赴く。

「殿！ おお、皆も一緒にいたか、ちょうどいい。」

「どうした爺？」

「実はですな、これをご覧ください」

彦馬から手紙を受け取り、丈瑠が開いて全員が覗き込む。書かれていたのは、結婚式の招待についての文面であった。差出人には『佐々木照助』と書かれている。

「・・・ああ、佐々木の息子さんか。そういえば、近々結婚するとか言つてたな」

「殿、その佐々木殿といつのは？」

隣に座る、シンケンブルーこと池波流ノ介の問いかけに昔を思い出して答えた。

「爺の幼馴染でな。お前達が最初に集まる少し前に、黒子として働いていた事があるんだ。」

家庭の事情で黒子をやめ、それから息子と暮らしていたと聞いていたが、「

「その息子殿が、この度祝宴を上げる事になつてな。

是非わしや殿達を招待したいと、こうして招待状を送つてくれたのだ」

同封されていた手紙には、彦馬や丈瑠達が記載されていた。が、その中に1人だけ名前がない人物が。

「おじいちゃん、なんで俺の名前がないんだ？」

「ん？」

名前のない人物・・・いつものゴールド寿司の半纏を着ている、シンケンゴールドこと梅森源太が突っ込む。

「・・・おお、確かに。先方のミスか？」

「6人目のシンケンジャーっていうのを想定してなかつたとか？」

「あ～、源さん、ちゃんとした侍じゃないから・・・」

「千明い！」とはちやあん！」

シンケンジャー若人組・・・シンケングリーン、谷千明。シンケンイエロー、花織ことはの発言に涙する源太。

そんな源太に苦笑し、彦馬は丈瑠に答えを聞こづとする。

「で、殿。いかがしましよう?式までそんな時間がないようですが・・・」

「行く――」

丈瑠の声を遮つて彦馬の手を掴んだのは、茉子だった。

真剣な眼差しで彦馬と丈瑠達を交互に見つめており、明らかに期待しまくっていた。

そんな茉子の様子に戸惑いながらも、丈瑠は彦馬から手紙を受け取ると、ショドウフォンで出席の欄に丸をつける。

「せつかくだ。みんなで行くか」

「つて、待てよ丈ちゃん!俺は!?

「留守番だな。招待されてない以上、しょうがないだろ?」「納得いかねー!」

そんなやりとりの数日後、式場となる教会の厨房スタッフに一次会

で出される食事に自分の寿司を出してもらえないかと、泣きながら頼んだ源太の姿があつたという。

ちなみに、源太の握った寿司を試しに食した厨房スタッフ達は開口一番、

「普通だな」

「普通、ですね」

「う～ん・・・普通だ」

と、同じ感想を口にしたのはお約束である。

結婚式当日。

志波家屋敷から30分ほどの場所にある小さな白い教会が、式の会場であった。

招待客に紛れて首元をいじくっているのは、丈瑠と千明だ。

「しかし、前にことはの執事をやつた時にも思つたが・・・タキシードといつのは、どうしていつも着づらいんだ?」

「あ～、激しく同意。もつと首元きつくつときつくつて・・・流ノ介、きつくなないのかよ?」

「こういうのは慣れだ慣れ。歌舞伎で地方の方々に挨拶に出向く時などはスーツも多いからな。自然と覚えた」

一方、流ノ介は見事にスーツを着こなしている。

その時、こちらも滅多に着ないスーツに身を包んだ彦馬が、1人の男性を連れてきた。

年のほどは彦馬と同じぐらいの壮年の男性だ。

「ここにいましたか殿。佐々木を連れてきました」

「爺、俺達は招かれてここにいるんだ。外にいる時今まで、そういう態度は・・・」

「いやいや、いいんですよ丈瑠様。こいつはいつもこのような感じで、久々に会つても全く変わつていない。それが逆に心地いいもんです」

「う、うるさいぞ佐々木！」

「それでは、こちらが？」

「皆さんは初めてですな。私は佐々木照助と申します。この度は『出席頂き、ありがとうございます』

深々とお辞儀をする佐々木に対し、流ノ介は慣れた様子で、千明もぎこちなく会釈する。

そんな丈瑠達を見渡しながら、佐々木は感慨深そうに続ける。

「いやいやしかし、彦馬から連絡を受けた時は驚きましたよ。遂に外道衆を打ち倒したというのですから」

「いえ、まだ散発的に現れてはいますので、油断は出来ません」

「そうだよなあ。この前なんか、丈瑠がなあ・・・」

「千明！その話はもういい！」

先日の事件を口にしようとした千明の口を丈瑠が押さえる。

「仲がよい事で。これなら、外道衆の残党が現れても安心ですね」

「ああ。殿達は本当に強くなられた。どんな敵にも必ず打ち勝つてくれるだろう」

「そうだな・・・おっと、それじゃあ私はここで。息子の様子を見てくるので。では皆様、『ゆっくじと』

会釀の後、来賓客の間をすり抜けて部屋を後にする。

その時、ようやく丈瑠から解放された千明が周囲を見渡して言った。

「そういうばか、ねーさんとことはは?」

「はあああ・・・・・・・・・・・・

「凄いわあ・・・・・・・・・・・・

一方、場所は変わつて花嫁の控え室。

彦馬の計らいと茉子の要望もあり、特別に準備中の花嫁と話す時間を貰えた茉子とことはの2人は、目の前の花嫁の姿に見惚れていた。

胸元が空いた純白の衣装に、決して派手ではないが装飾が施されたヴェール。

乙女の憧れ、ウェディングドレスである。

ちなみに2人の服もそれなりであり、茉子はピンク、ことはは黄色のドレスだ。

そんな憧れの眼差しで見つめられている花嫁は、恥ずかしそうに頬を染める。

「ちよ、ちよっと。そんなに見られると、恥ずかしいなあ・・・・

「あつ・・・・」「めんなさい。ほら茉子ちゃん、もうじこっ。」

「はああ・・・・・・・・・・・・

「茉子、ちゃん?」

手を田の前で振つたりもするが、茉子は未だにトリップ中であった。

普段は丈瑠に続いて冷静な茉子の珍しい様子に、ことはは花嫁と茉子をしばし交互に見つめ、やがて納得したように手を打つ。

「茉子ちゃん、結婚したいん？」

「はあああ・・・・つて、ええええ！？」

ことはの言葉に、瞬時に我を取り戻す茉子。

だが今度は花嫁の控え室であるにも関わらず、顔を真っ赤にして手をブンブン振り、呂律も回っていない状態であった。

「けけけけ結婚つて！わ、私はまだそんな事、考えられないわよっ！」

「でも茉子ちゃん、お嫁さんになるのが夢とか言いつたよね？」

「そ、そあーもう式場に行きましょーし、失礼しましたあーー！」

超スピードで会釈をすると、ドアを一気に開け放つてダッシュで廊下を駆け抜け抜けていった。

しばし部屋に静寂が灯り、何かに納得したようにうんうん唸る花嫁。

「・・・あれは、かうなり憧れてるわね・・・」

「何にです？」

「お・よ・め・さ・ん」

鐘が鳴り、式が始まった。

丈瑠達は全員が纏まって、照助のいる新郎側の席の最後部にいた。

そんな丈瑠達や新郎新婦の家族、友人、仕事先の同僚が見つめる中、

本日の主役である男女が赤い絨毯の道を一步一步進んで行く。

新郎新婦が足を止めた先には、十字架に背を向けた壯年の牧師の姿。小脇に抱えた聖書を開き、式の開幕を告げると共に言葉を紡いでいく。

出席者が牧師の合図で起立し、ピアノが奏でる讃美歌を奏でる。ことはと千明が若干悪戦苦闘していたが、贊美歌の合図も滞りなく終わり、全員が再び着席。

「指輪を」

新婦側の甥っ子である白いドレスの少女から小さい箱を受け取り、男女の目前で箱を開ける。

中には一つの指輪・・・エンゲージリングが収まっていた。

結婚式で一番の見せ場である、結ばれる男女の愛を繋ぐ一組の指輪の交換。

新郎新婦は恥ずかしそうに笑いながら、ゆっくりと互いの指に指輪をはめていく。

その時、丈瑠が横手から聞こえる小さくため息のよつたな息遣いに気付いた。

周りに悟られないように横を見ると、そこに座っていた茉子が頬を薄く染め、口に手を当てて感慨深そうに小さく息を吐いていた。

(茉、子?)

そんな茉子の横顔に、しばし丈瑠は動きを止めてしまった。

1年間共に戦い、互いの命を預けた女性のこんな表情は、今まで見た事もなかった。

それはシンケンジャーとして戦う戦士の顔ではなく、いつもの明る

く冷静な仲間の顔でもなく、紛れもなく1人の女の顔であった。

丈瑠の周りに、女性は少ない。

むしろ、シンケンジャー関連では皆無といった方がいいだろう。幼い頃より屋敷にほとんど籠り、彦馬と鍛錬ばかりに明け暮れた少年時代。

外道衆がほとんど壊滅した今でこそ外に出る事もあるが、それでも新しい異性の知り合いは出来ていなかつた。

だからであろうか。薄く化粧をし、整えたドレスを着こなす茉子の姿に、しばし心を奪われていたのは。

だが、そんな茉子の横顔に見惚れていた丈瑠の表情が、一瞬で険しくなる。

そこにあるのは、様々な死線を潜り抜けた戦士としての表情だ。

それを合図にするかのように、式場内の椅子の隙間に赤い光が灯る。来賓客や新郎新婦が驚く中、隙間から溢れ出た赤い異形 ナナシが、手に持った刀を振り上げ、手近な来賓客に振り下ろそうとする。

その間に入つた丈瑠は、移動の僅かな時間を使ってショドウフォンで虚空に『刀』の文字を描き、モチカラによつて出現させたシンケンマルでナナシの刀を防ぎ、瞬きするほどの速度で横腹をシンケンマルで切り裂いた。

悲鳴を上げて倒れたナナシの姿を目視した来賓客を前に、更に隙間から溢れてくるナナシ連中。

既に流ノ介達もシンケンマルを構え、手近なナナシ連中に斬りかかる。

「流ノ介、千明、ことはー皆を非難させろー俺と茉子で後ろを押さ

える！』

『はつ！』

『分かりました殿様！』

『皆、こつちだこつちー！』

流ノ介達が作つた道から、千明とことはの先導で脱出していく新郎新婦や来賓達。

その間にナナシ連中と斬りあつていた丈瑠と茉子は、全員が脱出した出口を固めるように集まる。

『茉子、源太に連絡は？』

『もうしてる。でも、なんていきなりナナシ連中が？』

『分からん。この前の一件から、まだ生き残りがいるとは思つていたが・・・とにかく行くぞ！』

『ショドウフォン！』

2人は共にショドウフォンを構え、筆モードへと変化。モヂカラを込め、虚空に自らを象徴する文字を描く。

『一筆奏上ーー！』

丈瑠は赤い『火』、茉子は桃色の『天』。

『はつーー！』

名々を象徴する文字を描き終え、ショドウフォンで文字を叩くように回転させる。

同時にショドウフォンのボタンを押し、彼らの变身が始まる。

描かれたそれぞれの文字が全身を覆うように包み、袴を思わせる黒いラインが映える赤と桃色のスーツ、胸には彼らが掲げる志波家の

家紋。

最後に名々が書いた文字が顔面に重なり、文字そのものを貼り付けた仮面を纏う。

ナナシ連中が驚くような様子の中、変身を終えた2人が名乗り出た。

「シンケンレッドー志波丈瑠！」

横にシンケンマルを振り抜き、峰を肩に当てて名乗り出る火の侍。

「同じくピンク！白石茉子！」

シンケンマルを持った右手を回転させ、斜めに抱くように構える天の侍。

茉子が隣で膝をつき、丈瑠が刃を真横に構えて叫ぶ。

「天下御免の侍戦隊！」

茉子が立ち上がり、同じ動作でシンケンマルを振り下ろし、

『シンケンジャー！参るつ！』

同時に刃を構え、2人は同時にナナシ連中へと斬りかかった。

其ノ壱（後書き）

ども、ウェイカップです！

予告なしでいきなり初めてしました、初となるスーパー戦隊原作の小説！

人気の侍戦隊シンケンジャーの番外編となります。

時間軸は先日公開の映画『ゴセイジャーVSシンケンジャー』の後です。

そして近作は、作者初となる恋愛要素も含めてあります・・・といふか、それがメインです。

カップリングは丈瑠×茉子！シンケン組では絶対にこれ以外ありえねえ！！（腕を振るつて熱弁

あっ、千明×ことはもアリだと思います！

流ノ介に源ちゃん？いや、流ノ介は殿一筋ですし、源ちゃんは恋愛つて感じじゃなさそうですし（失礼なw

そして今回の作品は元ネタがありまして、ズバリ言つてしまつと『仮面ライダー カブト』です。

どの話かはそのうち書こうかと思うので、カブトもう一度見直してみてはどうでしょうか？

では、ご感想お待ちしております。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0802r/>

侍戦隊シンケンジャー 婚ノ巻

2011年2月21日22時43分発行